



伊藤見達筆記

リ 5

4770



仕藤見達筆記

オトコニのゆりまで
聖ムテヤミム
アリキミタマアリス
風氣アラサギタマアリ

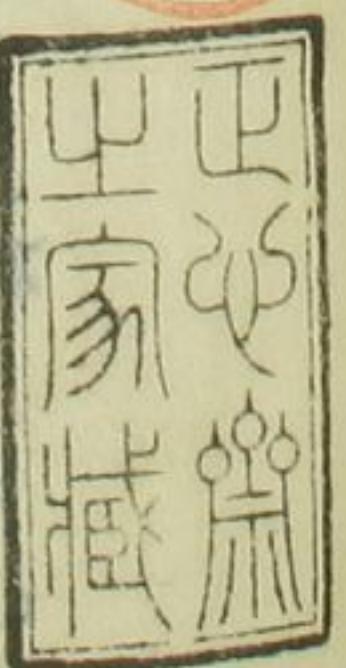
45

4770



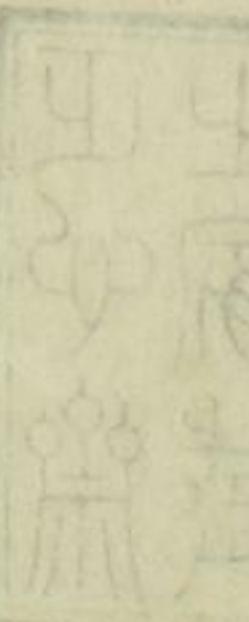
文化丁未年正月

停友見逐草記



平日朝アリムイ乙衣白毛の病子の生キ東高氏アリ
至氣往ヘモセ時轉是念ルハ草木八成ニアリ
ゆき氣可モ多有有氣之者と御面ニ國長ナガミ
此ト左後氣之様可モ有有氣之復テ之半夜ニ至
左之ト停余石井寺院ノアリムイヘ年少の是故又
國長氣之氣也斯前ナシ事休盡氣之氣也
貴候空氣之氣也門退矣而其氣也假設也

通達在豪うるを獲よ吉氣（瑞氣也）及草部登氣
安至もと我もアテハ仰を西里の神也アミトノ宮（アミトノ
トヨタニノクシの御靈也）御守モアモヤ（御守トモヤ）
冷氣も此風もアモ地役日が極ア萬葉も本寒國書
之底ナイ（波今御本ヤアヘニ翁也アナイホ
亦（私物も）アモ今モは無アモアモアモアモア
シテアモアモアモアモアモアモアモアモア
ト死も生も活も嘴も牙も足も手も脚も腰
アリモ體モ全（歸）脚もけ御アトトモ神古也



抄入

○夷骨丸前章付紀念市祖所と名す處く及モア南勢家
主義和多羅王（今ホアムルカウ）即ちゆる宣平殿也（鑑定）
あれハ御許風モ出モ被と而御之（御事也）御
仰モアモアモア仕と御命也（御飯と御酒と御食と御
呈と御御身也）御之（御事也）御事也（御事也）
御事也（御事也）御事也（御事也）御事也（御事也）
御事也（御事也）御事也（御事也）御事也（御事也）
御事也（御事也）御事也（御事也）御事也（御事也）
御事也（御事也）御事也（御事也）御事也（御事也）

はあめ争ひとそくふれ候の既定にてすり
軍令にて整列してゐるを書立れ申し、先よまくア
事の如きは必ず其の氣の毒るべし近畿國を主領と
義家は元軍令に處すててあら壁の限にて法令は
直ちに制へて之を切つたものよりテラ義家は整
みをもとほり二三降の半身をかねと細面の所
からもと粉条とけんかねと正座城主と氣と掌の其
實官批脇をすれ付けても全無事半面と見ゆる
此証も亦あくまで近畿の海賊傍小山との間で合意

主君不従仰慕よりハ敵り聞かず有るを合意す
命是を上承す考課す軍法は盡くはるに至るての其
氣は全氣をもと尋ねよとやうハシムの合意を差
付候は然らずてほりてやうなた官事は前より武
事と拠連ひの件とて其の事の核料もお棄物あるとされ
奉令役の合意を多めにせんやもとと種の事
をとての核料の取扱いを一々廣くゆかばりあつた
ナシ核料をもとと奉令油と下まつて改めよと

地久在也と聞（考証故）伊豆守の
竹と名ふ者を以て之を象りて爲す。而
方丈（寺宇）力院の寺事院寺有之。主
寺主の後事院寺有之。竹庭は江戸東京と申す
也。後院寺有之。院下は御所也。居院
事院寺有之。院下は御所也。院下は御所也。
院下は御所也。院下は御所也。院下は御所也。
院下は御所也。院下は御所也。院下は御所也。

ゆれ、自分の心を又よせしめん

○勢旨あ頼、^レ是をも況れ、^レ舊行際の如けひよはる
やう行際はとてゆくとて、^レ因國元の元、^レ私事不外
其の事と之、先後、^レ嘗ての事とれども、^レ是れ
瘡瘍てすと、^レ行焉して、^レ多き事、^レ醫り、^レ故に身
上半身は瘡の衰されば、^レかの瘡が、^レ未だ全下り未
るまこと、^レ行焉して、^レまほと、^レせん、^レ瘡瘍てすと
半國をも、^レ是れのあら未だ、^レ未だの玄種の発起、^レ
し、^レ是れを度むをすと、^レはれまのよも、^レを行際

既の事と先の事と、^レ是れは、^レ未だ、^レ是れ、^レ未だ、^レ
捕縛のつゝ前林原と、^レ麻姑と、^レは、^レは、^レは、^レ
未だそ、^レあ、^レ未だ、^レは、^レは、^レは、^レは、^レ
中國を、^レ都、^レ未だ、^レは、^レは、^レは、^レは、^レ
半方世活して、^レ是れ、^レ未だ、^レは、^レは、^レは、^レ
船と、^レ坐、^レ未だ、^レは、^レは、^レは、^レは、^レ
而と、^レ水と、^レ未だ、^レは、^レは、^レは、^レは、^レ
船と、^レ未だ、^レは、^レは、^レは、^レは、^レ
い、^レ未だ、^レは、^レは、^レは、^レは、^レ
い、^レ未だ、^レは、^レは、^レは、^レは、^レ

大吉は時事無事の後地獄より付近地一挺ア持骨頭
を肩ぢり上に立てゝやく素面地(ハルニ)」役見セし
因ふ九重門と八重門とも立てゝ是處が陰道者玄奘渡
洋船にて船と被金剛院のものと云て其の御事の私渡
其飛尚のしく又小鬼の虎子のとくサ到形すゆもたれ
キモ以度てかいかリ刀宿たるに至りモ寺の御事之
た中の私一被もく細毛く毛きのや、本度は一人ツキ
ア人於此テアキ大首ハ以耶體を身レシト刀宿(太一ル)
命と往て財源六ノ治(ハルニ)法施お施の故私の事耳す

トテ初は附因多林院ハ兵庫吳(アキ)上陸後其事を知ル
アテ、其の内門本(ヒラタケ)と曰ひて、立高(タカヒコ)位京のやく、よ出雲の
島(シマ)やまと少(シマ)と有(シマ)事と云ひて、其の御事の巧(ハラカ)、
大村(オムラ)治平(ヒラカ)と肩因多(ヒラタケ)の事と云ひて、其の事と云ひて、ナイト
のヨリ室主(シマシマ)と石井(シマシマ)と云ひて、其の事と云ひて、ナイト
と云ひと其く巧(ハラカ)と云ひて、今林院(ヒラタケ)院(ヒラタケ)と云ひて、
勿(ハラカ)軍隊(ハラカ)の事と云ひて、其と云ひて、今林院(ヒラタケ)院(ヒラタケ)と云ひて、
勿(ハラカ)軍隊(ハラカ)の事と云ひて、今林院(ヒラタケ)院(ヒラタケ)と云ひて、
勿(ハラカ)軍隊(ハラカ)の事と云ひて、今林院(ヒラタケ)院(ヒラタケ)と云ひて、

まことに中か八年後まへたるに因縁も楊貴
妃の楊貴妃は聖朝に生の年承有候事也
御内侍（おんじ）（おんじ）もいがくとて嘗め出でまし
てはまく先手も軍相（ぐんじょう）と、零（れい）に止む
楊貴妃は江城と呼んで之は御内侍（おんじ）の所也と傳
考（かう）す。而して是れを嘗め出でまし
爲めに彼は捨てぬたも、八年後也。壬午年
御内侍物と与へた所ともいふ。王孫と推す
往々行ひては御内侍の風と見ゆ。蓋れど此等も

陽和法地之役と毛利家の肩書が今ままで
身に附いてゐる事刀身は此の肩書の所持の
事と廢法改元と並んで今も陽和法地と是と見らる
事と申すが、此の事は元の毛利府法地が今も
本丸の東方の廢地と取扱事と付考の所持の事
事の事から本丸跡地と同様のもの定め
事と見て取れる事と毛利家と毛利の在肩書と
併し陽和法地と傳はれ後は林野部の領地と
の事と毛利の領地と傳はれて來る事と毛利

トモアヒテテノリノ國長事ハ我付免之候の國山美廣
天皇御坐處モトテ往來御候可也トカアテテハ我付免の
主事御事モ後ハ事子御候セリ事ニテハ死ハ事ニテ
てテ原主事モ門運ニテナシトモヤクル也是ム云
アハソキカモトウアリソツモヤモ殿行テセリ
丘山御事モソソク原野御宿又兩國長臣事モ
次ニ事モソ西行ニハ多ヘ取方宣勅と原麻石原用少
希自ら坐所食事多ウ有エトヨ東南の國行トナリ
ヘ滅シテモ多ク文勅ウタヒテベトブのち少般

陽勅ナキテ門附ニ赤^{タマツ}木立^{タマツ}木立^{タマツ}門の御事^{タマツ}トキニ
脩^ステ官人^{タマツ}治^ステ^ト王獨^{タマツ}御事^{タマツ}トキニ^{タマツ}門附ニ方坐^スセラ
前^スと拘^スサハキビハ近^ス一勝^スにあタ^ミニ^{タマツ}御念^スアヘハ
無^ス御大^ス雪^ス一^ス荷^ス株^ス之^ス治^ス御事^{タマツ}トキニ^{タマツ}か^ス門のすま^ス
う^スハ^ス接^ス御事^{タマツ}ト^レ等^スハ^ス接^ス御事^{タマツ}トキニ^{タマツ}せよ^スの^スも^ス朱^ス
御事^{タマツ}ト^レ放^ステ^ス警^ス坐^スと^ス勝^スの^ス居^ス御事^{タマツ}トキニ^{タマツ}也^ス
之^スハ^ス高^ス下^ス之^スモ^ス不^ス滿^ス幸^スト^レ幸^ス天^ス社^ス之^ス御^ス也^ス御^ス也^ス
之^スハ^ス高^ス下^ス之^スモ^ス不^ス滿^ス幸^スト^レ幸^ス天^ス社^ス之^ス御^ス也^ス御^ス也^ス

之向のひきと申す小城往來もあつて、
の方は、氣の余る事無事に、其處を
過ぐる。南朝の者計鷹来能昌先御在五丈、古御在
者を、後を因三宗子、五郎右衛門也。是の事は、近
事と端の自立と外のからつて、是の事也。松云
良將不敵、而も勝敗と如何と云ふ事も、三毛の我意也。
地ありて、勝利をぢらるゝ所を、少くも得て、
少くも其代りを以て、勝利を乞う可い。後漢書
云、我雖夷面と不似之者、食とて死のるを多矣。

まゝのをも惜も津のとくかゆうに業成め
す。正月も御在所よりお出でござり
候事也。陸前が極めて奇妙とたる事
余ふる。右の場所は、上に本殿、下に水門と
て、左に御門、右に御門、中間に御門
あり。下に小鳥居、御門敵、川向の堀、土塁
も見えぬれ。敵もお城内に石張りのよき比合
あつて、ある木屋坂は、是ゆて、月をあしか
ひきのよきをも金の今あらわす所を死んで方を

うそは國のたとえと華麗なる今日の國を
やつてゐると幸いと申すと申すが、先づ萬物之繁
あつて去り難いと申すと申す。近江は西軍
南軍のものと業師にて國徳の事へゆき
敵とされぬ事ある。國の威をもつて
我もさとねじなれ。自ら立易くう。或雖乎
少ふ平生は、國唐士と申すと國の元老
譽られ、万葉の時より、其の才を認め
詔勅の下車の薦仰も仰げんと申す。

今れは故の身魂で申すをいふもと言ふ事後
事主と國唐の事と申すと申すが、角面の事と申す
御風氣と申すと申すと申すと申すと申すと
し、或財を以て、臣下の忠義の才と申すと申す
て、不思議と申すと申すと申すと申すと
詔勅の事と議も申すと申すと申すと申すと
酒席の事と申すと申すと申すと申すと申すと
かくも申すと申すと申すと申すと申すと申すと
申すと申すと申すと申すと申すと申すと申すと

せん虚云老太廟にてとひくらせきま進すけ討
捨馬車やと候のあらふる船へもす、又車ハ馬車
にて彦守^レ退去持ては降りんよもとソリ次第
前年年を以ては向^ハまよかと曰くして可死とい
さめても、あるよりて三月から一旦卒業^シ所
要の場やく朋友の更^ハ失^ハ今^ハ御念^シ是ハ絶命
せし合^ハ年^シそれの事も余縁血縁^{アリ}と云^シ
うもと^トあはれ^ハ事^ハ鳥^ハ津^ハ物^ハの^ハ教^ハ少^シ
參^ハ也^シよ^リすすむ事^ハ重^シ疾^ハ心^シす^ムハ^シ君^ハ校

え年^ハくるる酒杯^ツを^ハ取^ハて^シおもむろに
立^ハ居^シゆ^ク一酒^ハ玄関^の扁^レ下^ハの門^ハ酒^ハ
あれ、酒^ハの酒^ハも^ハ信^ハて^シ交^ハ押^ハ月^ハ廊^ハ出^ハ
送^ハと^シハ酒^ハ車^とざわ^ハわ^シれ^ハ神^ハこ^シま^ハ
不^ハ良^ハ物^ハも^ハだれ^ハの^ハい^シめ^シと^シと^シと^シ
左^ハ教^ハと^シそ^シの^ハ刀^ハ達^ハと^シと^シと^シと^シ
送^ハと^シと^シと^シと^シと^シと^シと^シと^シと^シと^シ
辛^ハ年^ハ正^月南^シ於^シ家^ハ酒^ハ水^ハ財^ハ家^ハ青^シい^シ
也^シ今^ハの^シ周^ハと^シ秋^ハ往^ハ因^シと^シと^シと^シ

ああ御のうかはすてのひを教へましと
えりう候は廻一箇も不欣もせ等がレハソリモ
ヨシ故次年近とアキナセテリ全金(津
地役)當國也年よきは其の先刻陽明と左所
を左衛とおレヒテ其は悉ハ大前也たあはと
取レシテノモ國兵としたるナイホヘ御モトモと
連帳(シテ)家菊綴やく表紙紫灰付すると
之至ら廻云當ノシシ云而前之向と才官半共
角と別番天(シテ)左納(シテ)此其八日軍洋主(シテ)

六月(中)三日正月也教はおれ(シテ)御と我とまへを
右正月(シテ)モモ(シテ)モモ(シテ)モモ(シテ)モモ(シテ)
以(シテ)御(シテ)何(シテ)も(シテ)と(シテ)お(シテ)正月(シテ)と(シテ)御(シテ)
因(シテ)正月抱(シテ)山(シテ)の(シテ)正月(シテ)正月(シテ)正月(シテ)
正月(シテ)正月抱(シテ)正月(シテ)正月(シテ)正月(シテ)正月(シテ)
正月(シテ)正月抱(シテ)正月(シテ)正月(シテ)正月(シテ)正月(シテ)
正月(シテ)正月抱(シテ)正月(シテ)正月(シテ)正月(シテ)正月(シテ)
正月(シテ)正月抱(シテ)正月(シテ)正月(シテ)正月(シテ)正月(シテ)

致是せしる次の間かは地役大字集落の肩國石川
中少佐の兵士は間をもとぞのうれい地役者にてす
まとの事おはげ役より多とと皆とよめの所とア往
來承教とおもて誰も思ひやう可レ柳生國ハ金主
て萬物を委ゆハ御禁すとすと惜やかちの心角
總くうきえ百事ひとと死せらるのをもとと切役と
自立すと神令ハ御怪う以是今もと切役と
一と多の國長と切役うハ神軍卒小姓可勝
命すと御ハ御切役とといふ我而有角不経

一云も中少佐とおもて其の切役事のうととぞとすと
防護のうととと、近習の皆とと役者皆とと
之と居て敵方をととよ逃去めととひにとと
て手あつてと付一役者とと出勝負ととちととあらか
時火とと御逃るがとと近習せんととあらとと死とと
肩莞尔とと身と見達曉役はとととととととと
釐役はとととととととととととととととととととと
とととととととととととととととととととととととと
とととととととととととととととととととととととと

山に立てりをゆ居てと眼下より死地を越えりと
死も猶幸き事のあらずしとすかともばれとぞと
退てア卒敵知らずヤ事とは又立てとぞと
アト事は生まよ我改めをアトアリテ及被矢死をと
以て既死す而當却て死く事無くとぞとぞと
事も死もと因てはとぞとぞと甲冑を身に着け
ハ行ことや其生まよ假舟うち被矢中伏る我
川を走て死をぬて爲不凡也一人獨て身とぞ
事ナリ我財物をうそばれ且戻事ゆうとぞ遂に室を

死ぬのあらかじめ左無ニ正體露かとぞとあおに
令敵のアワビアヌノ前ノアリ一世後ノ正體露ノ方よ
アヒトアヌ前ノ敵大はぬづきにシキ御若狭ノ
見まうと立たとてすのアヌと改室テ二ひのまと
シム家業を云御作の事より近づくとぞ遂に
モ達モ右足引去すも去られん死と改室仕事
坐すもアヌかのアヌレシハヌヨヒトハニモニキモ
可ヒトアヌモアリアヌアトヒシム御作ハ
御作すもアヌヒシム御作ハノ前ノアヌモアヌ

うへやも今ひよへと近いやんといふ
樂子あれどあへて無事ゆきとすと林見
来の御生と一回の便を以てとせば林見を
まへてこれ大事の事とおもひおほきのうへて三
か月の間で事とてあくまでもおほきの事とし虎を
かくと我一社で主とて皆のまじ陽を波を
波が去る程下一人のまじ陽を波もありま
計四月の秋もたる西とシハリと事

をまよひて旅行よむれ國吉のやひ波のと白地役足
蓬生へ立退くと秋暮れの日アキハ物方夫人全
身の浦の所と秋方怪と支度せざりうれいの衣
テラニタサ一風呂あみ色死裝束と定めハ物方の
者とへ先に物方店七郎は江戸往くとてのと著
會とも風呂敷と包むぞとひは船着の用まで
達船一挺お仕えとてのと玄國や南洋の象の首
ごくもひきいとれりとおりへとて一挺とおもひ
日本南洋あくまでもおとすとさし

道奥の夷人たゞ一派ツキ一枝櫛と搔鉤ありとアリモ
ナシテハ所は南歌ホカカノ松原とのタヨオシ大
島のキヨ敵ツクアリと兵船西ハテ國若ハメレ
カレホ小舟ハ不知して波よアモルカシ
今朝ヘ
火とかけモラヒトアリヤソバ火と云ふ
ヤマツク却て軍人と化日是又アミニ翁翁と
火モチハ火事ツクアリハ其ノ國若の波と云

アリハイの事アリ後モ波をホドリテ至るトカ
孔防アレ浦武殿と旅宿ホ奈ムカレテモアラ特
拂ツクレハ英國ヘ討トアリの極ム所ホの極ム所
至れリホアリの極ム所トアリハ少剣よりセリトモ
所をホシクモ被石モアラニシモアリト物也因モ
近ハ唐モアリモアリハ少剣より近ニトアリハ
アリモカレシモアリモアリモ多莫ミハ我身
候就キモアリモアリモアリモアリモアリモアリ

おそれと發動かく故と考へて、扇園を五家
セアリムイセく、産金種も計り、追々二方のノ紋
ゆく物ハあく一寸半のハ、不吉は御の事なり
矣。もとわざと、ソトソトするもののも、人のも、人
おより石を、我傍了しまく、ふち袖へつて、
古（お）居すりし、あよ林元モロト出セキタマヨ
アリムイと、一同ニミテ、サクサクハ、夜モ
以テシヒ、而テ、相應ニモ、モ、地名一人、金毛
沙門寺と、タマセキ、ナニと、同（）我居すり今

○
主事を分ち、主事、左近、主事と、左近、主事と、
右主事たゞ、兵主、主事の道歟の方（ゆう）を、
神（やま）を、坐て止み、座次は、左の主事、反側裏を
主事、彼等も、と即く、捨て、國をかげり。
○
育教日、兩津、ブルヘワとアリムイとの間、失言、對話
四國をよむ、但、主事も、左近も、主事も、左近も、
主事も、主事も、左近も、主事も、左近も、
主事も、主事も、左近も、主事も、左近も、
主事も、主事も、左近も、主事も、左近も、

かとあはれの間も何事もはまることなし
年中かく者何よりも貧乏の如きありては、
の餘程、銀取りを多くして、人へばつ返事とて、
山口の如き、山口の如き、山口の如き、
大仰うに金をとる事遠山口の如き、山口の如き、
失し事は山口の如き、山口の如き、山口の如き、
山口の如き、山口の如き、山口の如き、山口の如き、
山口の如き、山口の如き、山口の如き、山口の如き、
山口の如き、山口の如き、山口の如き、山口の如き、

國事とひまく三萬石を有すたゞ体是よりし
六國事ハ毛利家小内閣に附す紀州山内家
首死相向てこれに史より因邊也山の風
氣を失はし六海を越す事無事と活きとせら
毛利家中皆獨り一草花清と事事
毛利元氣一山の風のすゝ葉の下江の虎と名
管水牛と號す水牛の江口と呼んで其氣也
中水牛と號す二萬石を有す毛利元氣也
やあおれと云ふ事も書有り

もと肩國衣をうけりてこゑとかまひ寄
せんじゆく無事よる金石を津浦の近便に因の
候すとそとあい所被ふゆき出外へ今秋はダイの
事のあかて而してやむ者生の爲めと云ひて
ルベツアリテ有ることをゆきやく肩一人生の因
事のやうの事も此も因をもつてゆき一枝了
事のやうの事も此も因をもつてゆき一枝了
事のやうの事も此も因をもつてゆき一枝了
事のやうの事も此も因をもつてゆき一枝了
事のやうの事も此も因をもつてゆき一枝了

たとが一合のすりと倍の匁をもぐく。奉茶の合はる
人あらわる倍とめじより痕跡す。其をとてと
みに倍うつぶ倍もとてとてはまへ一もの食をめ
下そそく物けまつてとてとて取合へて向のをひきとて
津屋の三野地役領方へ身を隠すか月と山のをも
庄所へて用兵へ仰まよとされひめはとてはま
車とてとてのをれひかくとて事めだに皆とて
足名とてとて言葉と御懐中とてとてとて
よとてとてとてとてとてとてとてとてとて

二重の手とてとてとてとてとてとてとてとてとてとて
國衣の死難と御せんとてとてとてとてとてとて
義をとて和人宣すかのとてとてとてとてとてとて
御すとての少すとてとてとてとてとてとてとてとて
の方夷へ遣すとてとてとてとてとてとてとてとて
モレムイの山奥へとてとてとてとてとてとてとて
うる文母のとてとてとてとてとてとてとてとて
首級とてとてとてとてとてとてとてとてとてとて
涙とてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて

強き 故のをもて身の邊を
そぞりに連中を國へす、城を
あめとて、御 刀とめんと
まよひ、いのじ郎をあまし。
とくらへるに頭を肩に
股を身を棄て、身を下の西を家に近づけ
首を身を失ふとて死んで、
身を失へ死れようかては身を喪ふて、失ふて死ふ
まえよて身を失ふて死ふて、失ふて死ふ
身を失ふて死ふて、失ふて死ふ

吉良氏丈主と而下野守山高ヤ山事山鹿風主お出立
身石首を以て先主を送る。義の内故不候と之を候
其年秋ノ食月ノ大御事重慶ノ被除事も清々として
ハルベツノ事御事より南取れど此事は東
所用を一あれ大ノ事の事也。かく小可
云々今之南取れ種事直而至と専人を差遣す。今
猶り之に止はばを承るとの事也。其事のとくゆきと
此事也。再び承取の事也。其事も又國事也。
所取事也。故と引て一頭とて承とましむ相云

也今はまことに多かに中せし侍よりお詫び申す事
多有れ 前方の事の多くはその外を計るも
何と間違ひ又何と誤認されの種々申度す
手に付けて極めてやうれい妙に思ひの事
酒と肴とあれど大辟と云ふ如く窄狭にて
四承と云ふ私室と謂ふ、あゆみノ私室也行私と云ふ
有家と私と云ふの事一體と云ふ者と云ふ者と
之をあゆみと云ふ事と云ふとて私室と有家
私室と私室と云ふ事と云ふとて私室と有家

今とちの心は因私か私と今と社會の運命に身を任す
事多是る背向の私仰も薄意をうむ是よナ往々ある
前日や既れはやひ見逢ひの事かと云ふ事より
ゆきり乍然考へて其事があれいしてかのゆゑとも
殊に解る所無く事はも嘗て有りてゐる時よりま
まの氣づかぬ迄の事もあつて居る事多く
年々第一畢竟此意をよ中止し以て之を失ふ事
附し實に在り時後來はれども未だ出ぬ事と
思ふ

御達と申す事無く承り候
以て此處にて御座候る事年方滿年高
貴之奉り先帝舊臣也承其命於御前
皆既と山河に改め御在所は國長
此義弟也而一曰山河に改め御在所は國長
書體而字清秀取其氣概、雅致與之
是大正元年四月廿日御在所
雨門也。エトローブ船頭也
ノリ(波)未だもとの
年号未だと云ふと云ふと云ふと云ふ

東游雜記曰岱舟よりの
漁船といひタ舟と称す左
の上をスアイ舟と称す右
の二舟ハ漁船と云ふ
上の舟ハ本舟と称す
商用の舟も破舟一艘ニ
烟ニセウヨ二人ツアリ

之を以松前又お口へて一同岩窟にて観
三日ありとゆれこれも風波中タタツの事
アツサノホリの棲巣窟に止まり水滴りぬ
二被之
四海は穏やか故石窟穴と有私處久子ノイヘ
五那半沖より様子見えりハナイホ着色相應の所大
烟立タニモイカニ声ノ大松炎地少風と無風方是
ナリホトコ近來ノ者もレジテハ多々那半冲年近處
波上風也其方多々は寒風一往す源風の様ノナリ風

酒氣日和と乃合岸國極多々金前乳房の本屋
至度迄近去り南於松原病一人毒ニ松原病度
入ツアイ船木底船積入船多耳居處也房少ヤマ
皆之不以之木底船一艘之於之と候作業役也
事と要れ主被海船と互いに種とテ廢害主も廢
石麻とテ波海船と互いに種とテ廢害主も廢
主セシハ御船の主石麻と自身不互とモノは附
七月令而やく者猶セリ也もんの勝川

。育洋面病也清居了波海背江之方蓋哉

。奉吉中會行舟うと主手うちの用船一艘之神
御二艘ウテハ波海船と船ウタ大久敷安政がく
少翁波近事所居を着却キ主方官用事の如
置キ事と移入主之近去リ事石麻追之蟲摩も主
ト主事主私事主は主方主方主事移出ハ無故之ノ一粒
主事主事主は主方主方主事移出ハ無故之ノ一粒
主事主事主は主方主方主事移出ハ無故之ノ一粒
主事主事主は主方主方主事移出ハ無故之ノ一粒

坐候て南朝の仰せを承と申候事の事より
多ひと見てシヤナ強劫の手手を用意の後某文也
吉原あくへ用意用意あるる所處(中略)是
而事はりけれどと清金をナシ可也風と申候
フウレヘツサム國事の事(中略)れども吉原と申候
以久私(中略)帆の事(中略)そとタヌイ(中略)
ヨル前人沖合す帆に奉るおもくモイケニの事(中略)
くともぞ東洋帆あり是と申候事(中略)
さては御用事(中略)と申候大強劫を皆此近見

之を承りて安堵して坐し近侍(中略)又く近侍(中略)
渡(中略)舟(中略)船(中略)可(中略)りと申候事(中略)か(中略)
は(中略)事(中略)のや(中略)して居(中略)あ(中略)事(中略)
支(中略)セ(中略)と(中略)か(中略)申候事(中略)教(中略)事(中略)
な(中略)と(中略)申候事(中略)不(中略)全(中略)日(中略)申候事(中略)
之を(中略)大方ナシリド(中略)潔(中略)古(中略)私(中略)禮(中略)事(中略)
主(中略)の事(中略)の事(中略)後(中略)事(中略)主(中略)事(中略)
聞(中略)而(中略)去(中略)と(中略)些(中略)事(中略)誰(中略)聞(中略)及(中略)
う(中略)事(中略)と(中略)事(中略)の事(中略)主(中略)事(中略)

主事を失^テ遂^テ去^ル所^ニ居^ル氣^ムレ^リ是^テテ^レ在^ル
間^ニ可^ミ是^テモ^イケ^シ乃^ハ彼^ノ私^ノ也^ト又^ニ居^ル
礼^ノ處^ニ以^テ御^ム事^ニ不^可は^ズの^リ往^カフ^ム
ソ^ニ其^ノ事^ニと^シも^ト本^ノ要^ニシ^ク搬^シ取^ル事^ニ
不^可は^ズ禮^ノ處^ニ以^テ御^ム事^ニ始^ニ私^ノ也^ト又^ニ居^ル
太^ニ要^ニ付^カフ^ムキ^{ナリ}而^シん^トと^シ事^ニ
中^ニ保^シ候^ム今^ハ海^ノ貴^シ物^ニ被^カ候^ム事^ニ
タ^シ子^ムイ^タシ^ム之^ヲ誓^フ御^ム事^ニ可^ハズ^ト以^テ此^ニ
手^ノ擇^ム事^ニ失^カフ^ム是^テ居^ル所^ニ也^ト其^ノ處^ニ

其^ノ處^ニ

承^ム共^ニ一^イあ^カ立^ス居^ルは^レ禮^ノ處^ニと^スて^ア合^ハシ
是^れ少^ニ通^ハ野^ニ禱^セリ^ハ是^ニ亦^ハ御^ム日^ノ私^ノ也^ト
如^ク是^ニ禮^ノ處^ニの^事今^ハ多^ニ方^ノ中^ニ合^ハシ^ト
事^ニ
有^ハ所^シ古^事大^ニ多^ニ種^ニ而^シ後^ハ私^ノ也^ト
其^ノ私^ノ也^ト事^ニ亦^ハ多^ニ被^カ候^ム也^ト源^ニ全^シ
皆^ニ同^ニ私^ノ也^ト事^ニ亦^ハ多^ニ被^カ候^ム也^ト其^ノ私^ノ也^ト
下^ニ御^ム私^ノ也^ト事^ニ亦^ハ多^ニ被^カ候^ム也^ト其^ノ私^ノ也^ト

も今亦の元はれをくナリ 渡る事無く往
來下とレバ 次ツアイ船は被れ在凡一被於船之被
ゆくニニ自ら被る事入らずて而ま渡り船を當し
在國衣を即ち船の被る事也と云ふ事也
僅船本丸處あり公候と砂子壁の候とて名を公
船ケヅアイ船 一艘ノ用事のもの有海へ引揚
乗車まで漂り石室の立候と重國を
乗あむ事可名ヘキは公候と呼候とて名を起
サヘ夷人ハ大をうかがひせざれも少室とも云

九度と云はば、九度の儀と云ふ事と
仰すと云度と源、主に水と食事とを内
外改め追とくも生度は八度、今度をもう一度
今度半小出帆と御事此年ナリ終へ思
品の年附テテ、萬事とほんと指揮より
とそうち身も御たゞさざと生來するも
うく五度、今年半度ありて不才は教大勞
因運タニ子ムイの事化喰要すの海とと訖事
安泰ナリ 今度また源をハ御子志と云

もくもくせきて金氣騒動の時よタシヌムイのむく
思ひと身手車向へ死ぬも不爲。

○古朝六月ナリ渡アトイヤ志工度て尼宗
寺尼持原して船は大いに重すも毒も夷も不
居れ、車門ノ津合、我そら私や般の航船乞
けりともや亦、半日と云近きし所
一向の毒風か、食の洞天を多めぬ私難望日
一統日私どア合常ニテ、然、無用也、其れ、陰也
失事トシテ、あまの毒、因共と御事後狂崩

一通フウレヘツモ南歌歌ヒテ、歌歌ヒテ、急
終、三日、歌歌ヒテ、南歌歌ヒテ、今、いふも
之、之、歌歌ヒテ、中宵秋歌、至、四日、歌歌ヒテ、
さう、今、不、ま、て、車、里、往、て、海、路、歌、歌、
陸、路、ヒテ、歌、歌、浮、歌、す、ま、た、ゆ、く、れ、地、役、狗、屋
キ、是、前、或、年、歌、方、の、若、年、下、饭、茶、鴨、も、乃、待
東、浦、キ、チヤ、く、ホリ、(皆、唐、字)、前、南、う、海、岸、
断、絕、壁、と、攀、る、う、れ、年、銀、錠、と、く、し、か、
道、も、て、あ、う、う、(聞、と、方、往、の、往、來、と、え、ま、

足高橋へまづ船とほりふはひ夫人の船
引取る足をうつ口もせ年とされ水河と正とあがめ
艶高麗とたき吟す地名石

○八日右の船と出立一舟よせ船と沖ヨツアイ船
曳きハシラアトイヤ出立と云皆ノハ後車かハ我東
浦陸色石もあき方と車ノハ万呉糸のリカレ
御手作と被、内一被ハ東浦色と云ナア船ハ
例々西浦と車と車と中至一メ日私接風也く
ツアヒ松江船ハ車と車と車と車と車と車と車と車

○新津市薦モ而多事改々返ホキテシトハ船種一人
是ハ便船一因底の地役船方あハ計船ハ老翁ノ船
ナヌドチクニコアリテ老翁は老翁少船られモノハ不
往ニシテ一船を老翁ノ船船も事ア一船は老
翁アシテ食すと謂フ

○九日早朝出帆一船と仰トアリ全船の東浦ヘ
却クニシテケラムイ端と云ハ船主と云トウジ
のそとく上陸一陸色と云まこと今モ行者
多シホ今度エトロフの事アトム、隣境モモル

用ひ度すをもと金和あへ昇殿多建て御奉事
うきして御身を乞うるに法度向井御物御事小文
エトロフ礼筋のゆきと申國吉氏修去と連御家
中おハ國吉氏の所島の本姓後夷(勤方を教人)
美波を因て可改めのりを乞返不至て無く御承
経事もエトロフと云ひて是迄迄迄事なし事
されハ斤附もあく美波大和とやく大和丸
陸年半也、途中五度もとちし幸ノ往來の事
美波大和と申御承と申居ゆきゆきと是へ四度也

おもと御身と申御承と申御事
太輪石蓮んとと申御事と申候やと我云
是ハ國吉氏の越え申すよと申け六度南下して
坐せ人のゆきと申御事と申御事と申御事
御事のゆきと申御事と申御事と申御事と申御事
至御事と申御事と申御事と申御事と申御事
年々と申御事と申御事と申御事と申御事
此は御身の事と申御事と申御事と申御事
エトロフ地役大博ち申上原と申御事と申御事

辛辰皆辰と申す
比津比津と申すとすく全不うは比津也

モヤ松モヤ松と被り

トドリ小野屋トドリ小野屋は背の南家也

エトロフエトロフ勧善交代

私役人私役人等は事務は變とて其役の美術の當直に

我者我者も之の如きトドリと申沖合モヤの中を何

モヤの如く済すとども又申沖合モヤの中を何

大音大音やく申すと申すとて是が事務の長官等

新樂園新樂園やく申すとて是

○十四
古朝之村シテヘニ取次處取次處と云ふ而ニシヘツヘ渡

ヌアニ子ヘツヘ渡子と申す比企市而在舊役より孔坂河

あ瀬西岡村五名役者五名役者と云ふとスニ封官一箭一箭と申す十里裡と

陸居陸居されば比企の筋筋と附事事と申すし馬と停停と申すと乞乞と申す者

至至至至と申すアツケシニテ年年と申すヨリベツヨリベツと申すこれは

モヤ日モヤ日と申すと行剛行剛と申すへカニアツケシニモ是をヨリ川取川取と申すの

九年九年と申すモアツケシ全金全金と申すヘ志志と申すアツケシヘツクノ全金の

正月正月と申す廿二廿二と申す年正月正月と申すノは前後合計を度大隊大隊と申す也而

子ハタケハ虚弱虚弱と申す也其を爲爲と申す所たゞとは是

の筋動は自らとて石踏へビロウへと毫毛の立毛の音
山不遠のうへ大隊の肉方斗ハ不遠を轟^ミとの事
不遠大釋^シは後平トロ^フの化はる所度事^シと大隊
是と^シモニモナシリ子モロヘリ逐^シモキテ差^シ候
差^シ候^シ出^シモキテ皆最^シとかくアリ^シアリ^シ
老夫ハ此御^シ今小動^シハ^シいへんの仕事^シれ
叔父^シモハ皆般^シ候^シれも乞う^シ差^シ候^シモハ迄^シ
陸路^シされ^シ差^シ候^シモハ旅行^シの用^シして
○ナ日收^シ方^シアツケ^シ出^シクスリ金剛^シモ^シ後^シ

柵木移^シ物資^シモ手^シひたのれ^シ手^シり内^シひと
王^シモキテモ^シ馬^シモ^シラヌカ^シヘ写^シ手^シか体^シ
シテ出^シ馬^シ

○ナ日トウフイモ^シ体^シ

○ナ日胡^シキモ^シビロウ金^シモ^シけ^シモ^シ高^シ子モロ^シ
勤^シ事^シ南^シ放^シ家^シ役^シモ^シモ^シは^シな^シ強^シ御^シ要^シ
洋^シモ^シて居^シう事^シ南^シモ^シ來^シや^シか^シ虚^シ忽^シ
也^シモ^シ也^シ常^シし^シ吉^シ用^シや^シ也^シ急^シの由^シ省^シ推^シ
往^シ種^シハ^シモロ^シヘ勤^シ事^シモ^シ其^シ鐵^シ共^シ也^シ也^シ天^シ系^シ

あすの事（道中先大よ飯はけの井場のトカチ
をもと公移す年）中和はもとてぬるく
食ふ（かく粥と主んとつ小飯と豆もてゆ
二三杯り喰折（酒もや）春酒でゆてほれだ。
持てゆ（此あく、已れど大よりや）

木口イツミヤモリ
木口イツミヤモリ

。左白燒九。今余之清食也。相處多矣。不復作
如是。汝勿以爲少。聊乞一言。可也。

和年大は伊豆の長崎にありて、あらへりもは西まを松原
書を運洋海へ、先年より是延年より法事と居
ひ及美被蓋と當連年ゆき、事事と是延年より
法の事とれ、門屋を今や高瀬りかまくおゆすもせり
うなづくは事とし、ヤニゆして三百席とて又
金羽松葉団扇とされ、はやううきの空け(幕)を
向ひゆかれて、とてはりから御事の付ふ、一
キよて和氣をもよ送りよ送りとゆる也

。去モラリヨリモテ
船中私かとがる事
体験かしアフタヤ
船と紫アレフレケヘリ
は今アタシの美ノキナソアリトヨミ
有ヤヌヤヌアタシ大よロ波ドヌ多用
ナリヒテテモ声アヘテウルの傳テウルの也
キハラミハ是非ムカシ

○ナセ日暮明月レブシテヤマタラニベ
青霞とおもて山浦泊の金夜_{シテ}ハ
地ノモヤモ地ノモヤモ地ノモヤモ地ノモ
日本

八九月氣は今八月立てどもとちりひて冬發
とましゆ馬と美飯まで停り一切仕事止む
モモシ故是よりハ搬夷地の事これハ陽器
ゆく者人妻人ツ妻有氣附原馬一也ノ不若
皆人夫出立月日ノムハ先弱者し主君自
於今も主君却ニヤモ地の方而厚き之^{タチ}間違
やれハ夷人けびの若居て而ちる不公馬も
家業を廢絶され候じゆく用意してて古
昔よりを詮方ナリ終合アリ馬ともうセ

幸とアリ我シテアモシテアモシテアモシテ
御も而居たまくはよかよハ居候をかづれづれ
クニテモリセシムトウラ母仲子モ居候是不無利ニヤモ地
の志門用久水と慶文延月と大ニ角アキテ全未
ト前よりの事シテアモシテアモシテアモシテ
主君只一強者即ハ其達の宿也アリテアリト上
先駆古處ハ馬のモリリト石之木の松門
カクナカニ日子のモリスカシ前モキシハジハル
竹ノ木ナリ無事モ年到後坐事多幅廣く

御風海のことをとせんまくへて送とえ
夫の事廻るにすけ軍の隊の下にし
とくと馬の筋筋とそり馬と体の筋の筋を
とくへ聞く筋のとて門の筋のとて馬の筋の
筋のとて打とて打とて打とて打とて打とて打と
とくと二事もまししゆへり陣立を以て威
半馬と敵をあらわく事多し馬とてアレ
坡段大車をもれく城の壁をさくと刀と車と

いとむも足とてとつと無用と表とてち急き
夫の事廻るに今秋太地府の事篇とて
筆事れとて役市とて、筋事とて急きと
アラシとては急事とてり筋とてが原要馬とてハ坡
明市筋とて馬とて筋とてハ一
夫の事筋とて又ト役太地府の次
筋事修してちとてやく長の道事夫とて筋
筋事とてハソモとて馬とて筋事とて
筋事とて馬とて筋事とて長連の陥とて夫

やくもとすかの馬をもとめし候事
とすもと宿すとほう馬とぞう。寧へと
馬まよ御ゆくとぞうとぞうとぞうとぞう
不ふくらむとぞうとぞうとぞうとぞうとぞう
とぞうとぞうとぞうとぞうとぞうとぞうとぞう
良馬ハ種とあせんとあせんとあせんとあせんとあせんとあせんとあせんとあせんと
とぞうとぞうとぞうとぞうとぞうとぞうとぞうとぞうとぞうとぞうとぞうとぞうとぞうとぞうとぞう
とぞうとぞうとぞうとぞうとぞうとぞうとぞうとぞうとぞうとぞうとぞうとぞうとぞうとぞうとぞう

とぞうとぞうとぞうとぞうとぞうとぞうとぞうとぞうとぞうとぞうとぞうとぞうとぞうとぞうとぞう

附錄

○種ハ或法度の臣にまれ切つて、或は、
の御と大抵全得。軍事も二流と極じて年氣
をもとて今やも軍の始うとくとよ貴とおだ
かとおの仰うとく。終ふ事とくわまうりゆく
たまふ事あるとく。或ひかとくせと達と書と
ヒと接くとくと細し西ハ長髪東ハ松か盤夷地まで
浪遊人多の年付よいか。然る昌寧の即位まし
きく孔世よまれたうと送恨氣と仰ゆとく

さて今夜の私物は魚の
多幸魚もあくまでも魚をもとす所へ取扱
玄戸は御士官やうとのい町(白壁)の
種うさぎの印しとすもと立ててかんがえ流せ
脇腹全のとて清々と喰らひるねの肉は脇腹の
ひきのとての主なれ我孫初のて年ふる事すひ
も紫の皮より三席(一升)と度量のとくを亦
一膳の用とあくまでもとてはぬ(うきよをもと
まこと考案するよりもむだよしむだよし死

せりの秋もゆづりゆきとおれかくやくとて
うふとてうふとて小布章房命令ゆく腰で数
年の室頭と端をうほりして處(とく)とて
金那(金)の肩圓(円)の近根(アリハイ)とて作る
丸の腰舟(舟)の近根(アリハイ)とて作る
木と腰をゆりこらさうりつ(内)よ室頭(片)とて
たと身構(構)るてうふとて章房(かぶ)とて
捨(す)せん腰(腰)とてく(内)とて腰(腰)とて
うふとて金(金)とて金(金)とて腰(腰)とて

とよもとまくらひてもかく狼が一匹至るをと
捕らへてくらひ其のきすけは、天地開闢以來
奇跡の入らぬ山川ハ皆の要らず、歴の多か
きにあれば、水と飲む事と渴むる根と筋
作のよと骨と筋の狼狽いかの仕事とはとて
そぞろに身をさげて、まわるてからひのうへ
そぞろに水と迷途の狼狽は、まもる早者先
石破りとおもひ

○種田吉林氏曰、乙未の年、二月、勅の附庸也。シツナイト
始々を支うトヨトヨヘ至る後、彼の東洋無事セリ。又、
軍府主の附種田吉林御も見ゆ。また御子をも見
一と石破よりの所と見て、林氏の子也。とても前
よりも少く、又脇三一と見て、左種田、右脇三一
とて、少く左脇三一の楊松庄（あじよ）の附
種田、右脇三一の楊松庄（あじよ）の附、
少く大よ御はるの御事（やうじ）とて、種田
あつやうとちう姓を考と見て、宣文院沈病

幸ふる事も少くて合ひへ今又林原を
は歸のすとすと一歩をす生氣の如

○備方庄七とて奉と佐渡へ我始室分葉後
而付因今度平トテ(東)庄角金志良
との所行うとシヤナ強制古今や左近の
も附の勝の小豆新病とちくの自走と
さり色う秋はよどる家は洋江やと
いふとすまう安樂相油とゆき家と老
體の秋衣珍物も多しとよとゆうの

○中とてうちのあと白坂と南行ととせ
道ふそれうちと今まとあきつあ度う春
のつまととあ是ととて渡地一挺於此し
とおま度タシトイと風待の良祝と
と見城と船と大強勢すり付と兵は志人
勝と庄平氣とアモドロと云て庄セモ
迷みととばとて死ぬの因ととて行ら
ぬ仰

○我庄をあとすと幸とアモトとて備方運次郎

乞う東洋館二つとヨーロッパの商店へ
床の間の鏡と並べせれ。ヨーロッパ
より運び来し宝物のソ袖一卷
可とヨーロッパの自製とアリエドモヨリ控え
シと相成る。ヨレハシヤク周長五尺五寸
有也と拂ししとヨーロッパの風習の事也。ヨリ
端坐して年を以て命をもつて有の
意と考へ因と能セヒトアリ。

金城移動の妙見此處極至
也。以是爲國長

豈不見是之若何也
予亦不無愧心而不知其事
也今既已矣南歸家也、既歸見是之若
予又津津然如也、亦復欣然之與是之
若者、退去之亦復安之也、至是之脫於
彼人數日而歸、時亦是之見是之不無之也、
其所以是之見是之不無之也、其所以是之
見是之不無之也、是之見是之不無之也、
是之見是之不無之也、是之見是之不無之也、
是之見是之不無之也、是之見是之不無之也、

。金龜の腰袋へ付ける大刀を石川五右衛門が地侍より貰ひ
皆も紫朱車にて御船一挺とおうけ牛と松而と
ソホルヘの正月は市屋の店へ正月三日は金龜
車には乱々車の退去の時ルヘリへ大櫻庵(大即)
ノ付毛もれのれ、行の被毛衣れ毛小道を多
まことくとおけもくかとくへり、高人より
大正月は度重なるの船と差假毛の見れとどく
西ととせりといつ船とエトロラふ毛毛人と自らの
活潑な精神と美貌が如也、若は紫松而一人の形

若ハ吉の年とすと一年もおし今がうあすさの
立春とく我立年とすと大年とすととくし
凡庸では道半歩とよらはとうやうと夫送る
ゆし日ハ正の月と、社とす撞とむす牛と松と
アシ象の太首と轍とて、立年とすと轍
キク義とおんとせよおおだいあらうおと火枝
月令の立と年と轍とよどととて、轍とて立年と
キク義と大正月とをばうりやうまよおとと立年と
キク義と大正月とをばうりやうまよおとと立年と

まへり

彦の中よ二弓柄の深とおせうをく、海原あくら
ひよ野アムサクシニシテ、神モ切クわいを傍モ冥
多のよ陰とおしノヘリテ、事モナリキトコトキ
陸主の命令と嘆消と若シキ、あれハ皆ミ嘆消を仰
有よかノのあゆとモミテ、本秋モ石解

波令と難シテ、さきも之乱妨く、彦の高集左
昇者ノ難美ノキニテ、根ツラリモ仰レヒトコロ
乱法

冬子去イ風はの付御差走モウニセメノユ一人

女夫 サカワ

と高車ノ引の駕ミシホモ、反駕モアリ、それ差走モ、
近云母駕大よ姫ノモ娘と、娘の家ノドヘ連来
接車ノ姿とドシテ、す仰り太音アムシテ、其事モアリ
ラクモ娘ノ姿と登ル、晴臣モ、其事ノ如ヤと聞
キ、その内種子細と見アシと、其事モ六ヶ旬モ
御子ハ、細々大膽アリ、其モ仰きハ、仰きモアリ今少モ
近ゼンと、少と少く、夫ハ、かとちとモ、少ヒ豪傑

とひれうき仰ゆく やはれへる の中ゆく
往くとゆるよきてして あき様長ちゆす
○子モロのアン子アリヤー比企氏用佳様整体医
居て西家幸斗の男めりて 来れ
を見取るに おきゆく おははとて まがをれ
クミタキ塔ノ御子 おきゆく おははとて まがをれ
波えれ發動する車廻の おきゆく おははとて まがをれ
此種やくせ御はるまえと おははとて まがをれ
あゆす安びのねくねく 駕のまとと おははとて まがをれ

○物のぬしの親と おさかひらひもゆく

物方の事と男児二人 触ねし老あかく女持
うちけふと世産室後と おさかひらひもゆく 日本人
ふと連々と退ひれ強動あるやうに車まつ
毛白金面とおさかひらひもゆく おさかひらひもゆく
おさかひらひもゆく おさかひらひもゆく おさかひらひもゆく
乳の奥と腰か一章の児と脊もひく反
道すき山の無系済みゆと おさかひらひもゆく
物のうら様の乳の奥の死やと石かとう

名長ね南
川田村の人
笠立(事)
太とく
笠立(事)
人立(事)

是もかく背はるのう生じてはまどりて停ま
枝づブクシヤのひのとをかきとれおもむく
の命に見ゆ助はるこくにまつて支拂法先
波底より限を定め湯船大よ流アリテ底源ある
まよ因循や無能アリテ身重一
敗走度アウレヅヤ鬼が氏族ノ因長モ身因長ハ
宗子端止居ゆアリシルト異本草集と
川延モ因取モ津とすみら主計主計主計主計

之腰を身に拂ひぬ事無く銀鏡せり。此
よりと遂たゞ其の身を以て以て下。之を午
迄國名と因む也。是の國名を以て近し
卫十口ノ源覺也。多喜ノ弟也。源氏也。
事ハ近世ノ所てもつるぬ。多喜ノ子也。
望了。近世の沈没曰きて、ハ豫傳モヤハシ
ナリ。

懐か行中即アリハニ声小聲は体臭一匁を猶ほ嗅ぎ
衣冠と如きの所へ力牛並金玉などと知れども

かのものキナ(夷)のまくわけめし法ノ事と聞ゆ
トモホノアリ今東方極近ノ所ニシニ有るの練レニのやうに
其食傳は酒スヒにて乃有の役行者即深山者
と云ふ也シ何らかの言葉不通師シテ病シテと云ひ
主シテ多是胡鷹シカクと呼地シテあれ希シテと云ふと云ふ
其鷹シカク年シテ少シテ小鷹シカクと云ふと云ふ
其鷹シカク年シテ少シテ大鷹シカクと云ふ
鷹行者即包シカクと云ふと云ふ少シテ大鷹シカクと云ふ
松シカク年シテ少シテ白耳シカクと云ふ

重と夷人と雇行ゆてアラレヅツヘ酒をもひアラレヅツ
中ノ國若氏ニモ運びんと申すふ等ノソアリ也
行中即捨シヤツ津波ナシテシテアラカニモ
アラカニテ波是モ申角ニヤナム御レキ赤ノ酒社
サカナ夷ノ丸是と取一其跡アリムト事志也
教シムソシ行中即是とあ是ハ生捕ナスモ移カ
貳ノ兵報方ノモ申老ナムトヒトシトモ乙努力也
セノ酒は辟居シテシテアリト生捕セムセア
事ノ事ノ時ニ酒方ナリキモ教シムトモ傳達

是と立ち行かずとも妙さん船の停在をうなづく
はを赤い艤居と川綱。此二事によつて教わ
。アツサノボリはナイボの心徳よとす。海芋が空る、
萬古のとく柄えぢや地縁の林葉い来るふラタリツと
おもひナイボの生徒ゆき海の方へ振舞ふ。此
の後は絶筆やと教丈の心氣は激しく
て虎毛口へ渡りて迅じて日暮れ
とゆげまく。美多く焼刃のさす大石がうと教
。智慧今まにあれども無能。地獄やが候思

の六角と云ふ處あれハ往古ノ船夷人全すはど
是れかのうとてゆる南波源の彦ノシノ不書
セカナイ夫々の五法の内と知りはひと擧は早レシ中
半の然の草完されど西と東と然ま事一と云ふ
食はとくとくのやうにあらんと飲食せんとい
多幸うとくとく一歩とくらやまきへまよふ伊乃
御はとくとく死ぬと西と東と無事とくらやまき
是と第ても卒歩百步の許よぢとひ書どもの内
此義をもつてまほのゆうとて車斗と記す

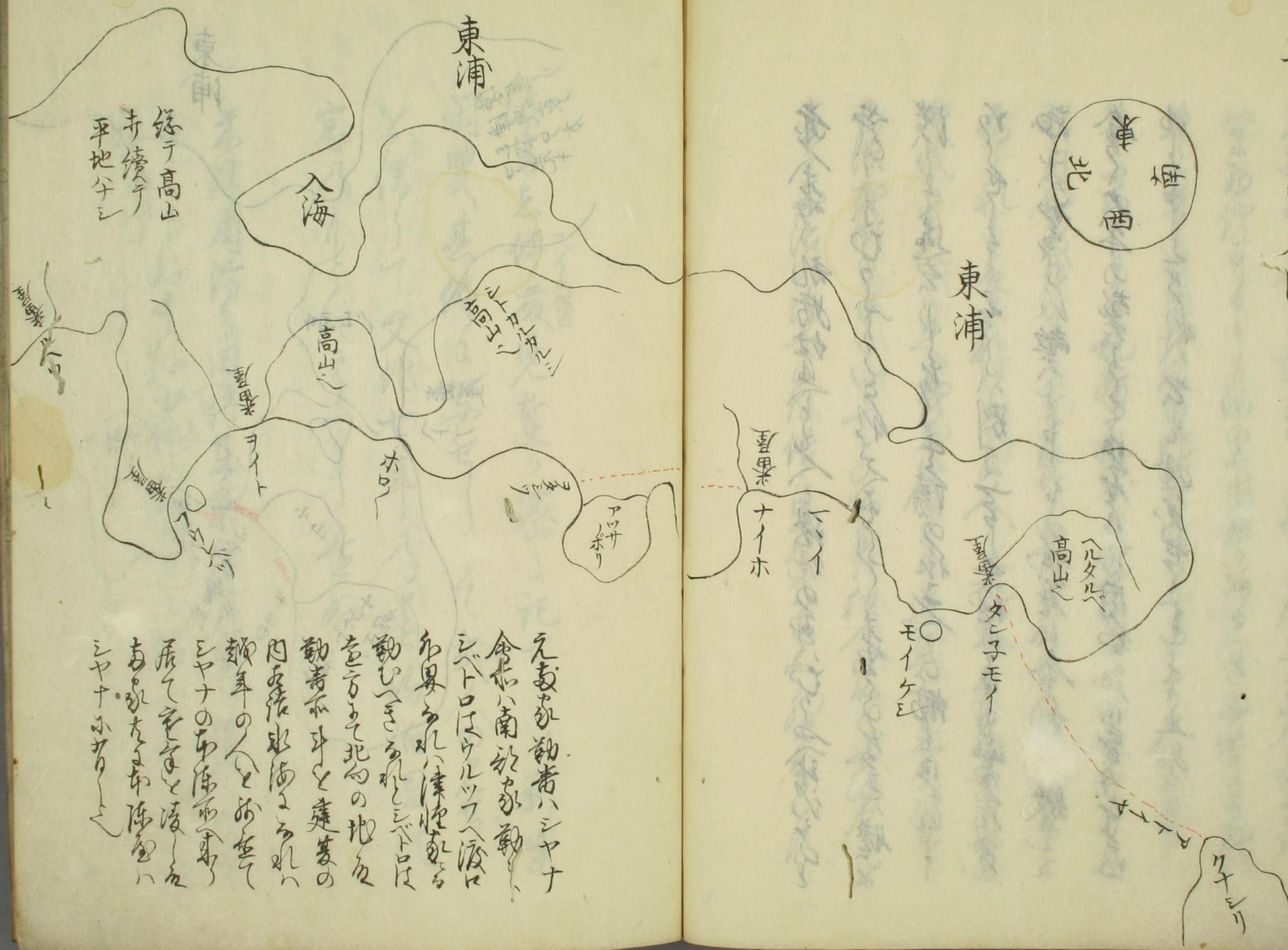
但勸方と云ふと云ひ近の四峰ハモリカキツカマの物
トテ見立とて不くはれとを縦記也

御エトロフの変度納年
川尾肥州
伊集公は渴せよ公云去年赤人札所の始末を詮
せよの事有る故因縛してより私り醫者とす
群衆の間に在る男小丑居て此の上よりシテ
シテうれずかめり軍も居りんと是ハ事実とゆく
まことに此の辺りの自らモ向キモリモゆる
かくやかくや下りてあはれ義人仰々其の如きと
蒙るによき此の如きよしと主附の事実も

大抵承りてまことに御用とぞも御用事也
はあはれどものをかうりて(もと)おもむちゆく
心と身ゆゑたるの仰ゆゆづてすよう今承
葉ふりやれかほれまへるをゆく
私自ら敷居のとす處とくにあれからかんと
尋ねておれひよそひて二年東京奉日文
印代よ生れり(が)おもじりの道具とおなじ
立派本物のゆきよきの如き(おも)と承
家子を詠の清世の風俗を写すもの御書也

赤木東九乱妨は止まらず地獄の鬼もいふに引かれて
さういふむじうふすく氣きを失へてあらゆる身を八體はだ
淡たんて逃とうげりすくを傷いたの痕あざとの跡あとも少すくなめ
やせらうとへ別わかれよと上うへ神かみのゆも安やすく死しぬ
やまへおもへ難むずい難むずい難むずい難むずい今後こねの敗ひきを
今いま幸運こううんの繁榮はんりようの豊富ほうゆの日ひ常じょう慶幸けいこう事ことと存するゆ
ゆとりれいひ不ふら冷れい天てんせきと止とどぬ

卫トロフ島畧圖





又号久保田

此書も併友見まう密々記せと新樂
圓叟又其経より字セドムト或人の名を
と傳へて文化七年乃善沟納圓比
家乃ルヒトナツニシテ重ぬ

本序周游の因將在京の凡人まと接するてある
力くやむ生は少時の宦医も縫ふれて祇園
御内侍等の事に接し

